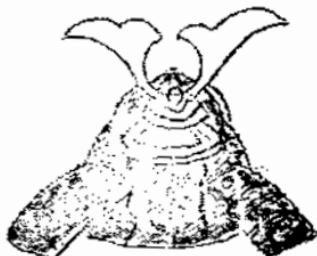


忍辱の鎧



闇劫惡世の中には
多くもろくの忍辱あらん
悪鬼その身に入つて
我れを罵罵ののしまののしませんせん
我等仏を頼のぞ信して
當に忍辱の鎧を着るべし
是の鎧を説かんがための故に
このもろくの難事を忍せん
我れ身命を要どす
たゞ愚士道を踏む

〔法華經・勸持品第十三〕

鷲峰 第1巻第6号 目次

恩辱の體	鈴持昌	1
心身に対する法華経の屬		3
我れ天上の榮華を求めず	日高白象	4
我が出家の動機		
見捨られた民衆の中に	藤原成憲	10
樂しい朝のおつとめ	藤原義誠	17
信仰相談室		
創価学会の独善的排他性について	日高白象	20
関西街教界見地の声	萬澤会	29
小幡新産・長谷正徳・浜島秀温		
大島源静・和田龍連・富田栄妙		
田中行則		
本誌大改正		
編集方針と読料について	編集部	36
あれから三年		9
編集後記		44
鷲峰の歴史		43

少年に対する法華經付嘱



弘安五年十月、日蓮聖人は御癌終を告げ被囚に、当年才三才にゐる少年

經一夢と呼びよせ、天皇に法華經をす、めの前罪漏罪を還暦されたまし。

經一夢の後の方を僧日像一人、二十四オの冬、慈濟の大誓願を起して一百
日間、鎌倉由比ヶ浜の海中にひかゝて毎晩夜中の二時から夜明けまで自我
偈一百巻、釋迦十方佛を奉誦、かたへの間、絶一才七分、継五尺余りの紙
面に法華經一部八巻二十八品を写經、結縁縛相を感得して忍辱弘教の旅に
立ち、生涯を磨して遂に大聖人の遺墨を果したのをした。

法華經信仰は如來神力呂の如く本心の付属より始っております。この村
屬の白巣なくしては所詮、法華經の受持も宣佈も主難であります。今
日、宗内青年運動が盛んになりつ、ありますか、頗くは青少年の一人く
ゞが經一夢の如キ付嘱の自覚に立つてもらいたいものです。



我れ天上の榮華を求めず

日 高 日 象

我れ天上の榮華を求めず
また地上の王位をも求めず

たゞ苦しむ民衆の中にあって
民衆を救わんと纏うばかりなり

これは古代インドの聖典バゴワン
ギイターの一節であります。かつて
インド独立の父と仰たわれたマハト
マ・ガンチー翁が、インド国民の陣
頭に立つて大英帝国の植民地化と戰
つていた頃のこと……ある日、突如

としてイギリスの武装官憲がガンチ
ー翁を撃殺殺戮しようとして私邸を
おそいました。この時ガンチー翁は
怒号する官憲にとりかこまれながら
理不尽な蒙難別離の中にあって、し
かも越客としてインド四處の民の上
に祈りながら、居あわせた同志と共に
に、静かに手拍子を打つて歌つたの
も、このバゴワン・ギイターの一節
であつたのです。

一九六二年の夏六月、インドの首

都ニユーヨークにおいて世界各国の代表をまねいた原水爆禁止世界平和大会が開かれました。その席上、大会の趣旨をたゞえた演説として、再びこのギターメンが歌われました。

ステージ上で歌が始まるや、ネーブル首相をはじめとして感動するインドの代表者へそれは曾つてインド独立運動に投身して來て指導者たちにあります（等しく、今は）キリヤンギー翁を讃美し、ガンダームイ族拳銃殺戮の往跡を偲んで、あたかもその時と同じように、何時しか決をたゞえながら、静かに手拍子を打つてギターメンを喝采しました。それは満場の各

國代表を感動せしめる、余りにも印象的な光景をもつたということです。思ひに三界火宅の娑婆世界にありて、六道に輪廻し要忍苦惱する民衆を救わんと頑つづくは、たとえは觀世音菩薩の三十三身の如く、身を三十三身に変じて、おのれの立場をぶりすて、民衆の中に飛び込み、民衆と苦しみを共にしながら、進んで口民衆に代つて、その苦惱を我れと者が身に背負つはざむなけれはなりません。



大願を立てん

一を唱和しました。それは満場の各

「日本國の位を譲らん」

「法華經を爲て、觀經等について
後生を期せよ」

「父母の願を叶おん念佛申すは
なんどの種々の大難出来すとも
智者に我が義破られずは
用いじとなり、

そのほかの大難

風の前の塵なるべし

我れ日本の柱となりん

我れ日本の眼目となりん

我れ日本の大船となりん

等と書いし頃破るべからず

とは日蓮大聖人の開目鈔における

余りにも有名な繩子吼でありますか
大聖人は、たとえ時の政府から、

へ苦し法華經を爲てうなれば日本
の国位を襲つてやろう。だから蘇
無量壽經について乞仏を唱え、今生
の榮運のみならず来世の極樂在生も
襲つたがよい。

人然し、若し法華經を爲てないな
らば、お前自身はあとよりお前の父
母の願事ではねこしまつとく

等と、或はあとされ、或はいざな
わることがあつたとしても、三大
誓願のもと今生には「地上最高の王
位」をも求めず、如何なる要難にも
屈せず、後生には「天上天上の榮華

淨土の安穏すら願わず、雲住处遠

「三界火宅」の穢土を、そのまま「三

界仏國」の淨土へ開闢せしめんと、

法華一乘の菩薩道を、その六十一年
の生涯につらぬいて行かれたのでし
た。



苦しむ民衆を救わんとするならば
凶のう人々が救いたるまで來り説ね
ることを躊躇せなかつてなく、ひとえ
に超えの大慈悲心により、みずから
大勇猛心を奮い立たせて、進んで十
方無邊の人々の中に身を投じ、たと
えそれらの人々から誤解され迫害さ
れることがあつたとしても、下種結
縁をもつて「人向開闢」「国土開闢」

の実をあげて行かねばなりません。



法華經常不輕品オ二十の中で、常
不輕菩薩が舎頭に立つて、道ゆくす
べの人々を合掌礼拝したという故
事の引用するまでもなく、既に序品

オ一の中には、釈尊みすから、
大法の雨ふなづを降ふりし

大法の雲くもを吹ふき

大法の旗はたを舞まい

と示され、また、

魔の兵衆ひょうしゆを破はじして
法教ほぎゅうを垂たれつ

とまでも述べられていますが、蓋

し、これらのこととは寺院、殿堂の内でなしうることではありません。魔の兵衆を破折せんとするならば、すべからく衛護に立ち、民衆の中にあって憲鼓宣令しなければならないのです。



思えば歎單三十五才成道の朝より

八十才入滅のタに至る四十有余年の伝道は、常に中インド大陸を屢々く遊行される間のことでありました。また一代の肝心たる法華經詔法の座も王舍城外、靈鷲山の頂こであつたことに思いを深くしなければなりません。

せん。

日蓮聖人三十二才の立教開宗も清瀧山廻であり、尔來、身延入山に至る二十有余年の開教伝道も、常に御廟の御子風に終始しております。近くはマハトマ・ガンギー翁の印度独立運動にしても、民衆の中の行動によって始めて達成されたことでした。



人類の危機の孽難亂打されること今日より甚しき時代はあります。この時こそ日蓮門下口、寺院殿堂の因習の籠を蹴破つて民衆の中に身を投じ、歎尊の如く、大聖人の如く、はたまたカンギー翁の如く、獅子王

の心を奮い起して、苦しむ六道の大衆救済のため、魔の兵衆折伏のため

正法を宣布して行かねはなりません。

それには、おのれを勘定に入れる
ことなく、天上の榮華を求めず、地上
の王位をも求めざる者によつての
み、はじめて可能とされるというこ
とを肝に銘すべきありますよ。

日蓮門下の中に、少くとも自らそ

のようたりたいと願つ人々が、累
して幾人いるのでしょうか。若し、
そういう人々とめぐりあい、共々に
精進出来るならば、これとすぎる幸
いはありません。

人間機関車として大衆に觀しまれだ
社会黨の浅沼稻次郎が講演壇上、山口
乙矢といつ無法青年によつて刺殺され
た。昭和三十五年十月十二日のことだ
ある。その後まもなく犯人山口も獄中
みずから首をくつた。あれから三年
もはや政界の人間機関車は忘却された。
然し犯人山口は右翼の人々によつて今
なお神として崇められている。

私自身会式の廢止、その日のテロを
思い出す。そして立正安國論の一節に
思いを深くする。「國土亂れんとする
時は先ず鬼神乱る、鬼神乱るるが故に
万民乱る」——平和の道へ進い、そして
腹しい。

　　へ音水英達

あれから三年

我が出家の動機

見捨られた民衆の中に

身延山大学三年生　藤　原　成　憲

父母の出家

私の家は、奈良県宇陀郡大字陀町の妙徳寺というお寺です。私はここに生れ、ここに育ちました。

然し妙徳寺は昔からのお寺ではあります。父は藤原祥造、母は妙國といいます。父の代に、父と母とが同時に出て家することになりました。それまで生んでいた先祖代々の民家をそのまま寺とし、屋敷の中央に本堂を建立して、寺院としての景観を整え立

ばかりのものであります。

父は藤原祥造、母は妙國といいます。今、申し上げましたように父兄は一緒に出家しました。父母が同時に出て家することとは世間では珍しいことかも知れませんが、それには次のような動機があつてのことでした。

父の職業は、以前建具屋でした。

父の印刷業へ参りました。印刷業をしていた頃、父の胃腸を患いました。何時かなつても医療の都はなく、父の田舎にて養育して行ききました。この時、母が父の身代りとなつて、罪障・癌腫・疝氣の修行に入つたのです。

実家からおまえを田里、一山へえてカタヒ出だす。その山腹に法華堂で斬蕷されたに滝があります。この滝は白木といつ土地にある所から通常「白木の滝」と呼ばれており滝のそばには山神を祭るお堂があつて参籠出来るように設備されました。

母は、この意にござりました。そして三七・二十一日の間、監といわ

す役といわす、休む間もなく滝たうだれでは、ひたすらに父の病氣平穡を祈り続けました。

満願の日、遺言の中で、母は偉大な靈應につれました。諸天の感應があつたのです。それからといつものは父の病氣が、一枚く皮をほぐさうに良くなつて行つた、といひきうまでもあります。

私の先祖の中に口出家した人もあつたようです。どうして先祖の信仰が繼承されて、田原から父も母も法華經を信仰していったのですが、父の病氣、母の感應を契機として一層信行を励み、遂に父は洋體、母は妙圓

と受戒して一緒に出家し、家を寺にしたのです。

父母の修行伝道

在俗の立場から誓願して出家したもの、父母に一般寺院住職のような僧侶としての素養があるはずはありません。

然し如来祕密神通之力のお題目は一人でも多くの人々に伝えて行かねばなりません。そのことが本仏の恩に報い、曰蓮聖人の恩に報い、總じて法華經の恩に報いるものであるならば、何はさておいても自らお題目を唱え、人にも唱えてもらうことを行ひました。

業をつゞけて行きました。

つれだつて庵にこもり、つれだつて寒修業や夏の土用行もしました。

修行そのものが布教だったのです。

真剣な修行にひかれて信徒も次第に出来て来ました。然しその殆どの者は医者に見限られた病人か医薬にことなく貧しい人々ばかりでした。

父母は、それらの人々と共に庵に入つて祈りました。真心の祈りが天に通じないはずはありません、「般陀羅金言、當生信心、無有盡身」の經文の如く、唱題不思議の現証はあらわれ、病人は次々によくなつて行きま

ることが出来ませんでした。

した。いくたの氣狂いもよくなりました。そして熱心な信者となって寒務業にも土用行にも寒教宣会と共にするようになって行つたのです。

今年の夏、身延山学生所教隊が廻西行脚の歩を奈良県下へ進めた七月

二十九日、桜井市若頭布教の隊列の中に、父母に従つた白衣の信徒數十名の姿がみつけられました。

萬峰会の一員として学生布教隊に付して、信徒の妻に接した時、父母出家して、法華經信仰を通して何とか対して、立ちたい、とばかり念願してゐるのをあります。

「父母の悲願は、愈まれざる人々に對して、法華經信仰を通して何とか役に立ちたい、とばかり念願してい

るのをありますよう。

かえりみられる

民衆の中に

以来のことが、既しきにつげ、悲しさにつけ、走馬灯の如く想ひ起され、思わず目隠の熱くなるのを禁ず

父母の膝下に育つた私は、幼少の頃から、一つした家庭環境の中で、

おのずからお題目を唱えていました。経信仰の靈験を手のあたり見るたつ
何時の頃から唱え始めたのか、その
記憶はありません。お題目の中に、
お題目と共に育つたという方が適當
かも知れません。

小学校の頃、父母がお題目で病人
を手おしになり、氣狂いをおおしたり
しているのに驚嘆したことがあります。
私も父母につれられて庵へも行
ったことがあります。庵の中でお
素れ狂う気狂いの姿とそれを両脇か
ら抱いて意に祈る父母の姿、そして、
氣狂いが本当に帰ることによつて本
人を口じめ、家族一同泣き伏して起
ぶ姿、等々、こうしてさしまじか法華

経信仰の靈験を手のあたり見るたつ
け私も父母のようになりたい、そして
迷える人々、医薬より見救はれぬ人
々、社会からもかえりみられない多
くの人々のために奉仕出来る人間に
なりたいと思うよつとなつたのです。
私の兄弟は三人です。長兄は秀憲、
次兄は微治、私は末弟です。私が父
のあとをついで出家することになつ
たためでもあります。二人の兄は、
在家の立場で父母を助け、法華經の
お役に立つ志を立て、秀憲兄さんは
印刷業を起し、微治兄さんは建具業
を起しました。

父が建具、印刷として出家といつ

三つの私を離んだあとを、三人兄弟

がそれよく分担するのも不思議な因

縁ことのよつて思われますが、今年

七月三十日、身延山学生布教隊が大

仏に新薬布教を展開した時、秀憲兄

さんも馳せ参じて激励され、美術印

刷の社長をしている関係から鷺峰誌

の表紙印刷一切の寄進を申し出ること

いうように、兄弟三人が父母の法事

経営を、それ多くの立場で繼承出来ること

ることは、本当に嬉しいことと思

います。私も二人の兄と負けないよ

うに修行したいと思います。そして

父母を手本として極める多くの人々

のお役に立ちたいと思います。

父母出家の当時修行した「白木の

庵」は町から四里も離れていて不便

でありましたか、幸い年から一里ほ

かり行。大同じ町村内に、誰も管理

していない高三・四木ばかりの庵があり

り、村の了解を得て父母がこれを用

り、参籠出来るお堂も建てました。

父母は今でも信徒をつれて毎月十

六日には白木の庵へ、毎月二十八日

には大字院の庵へお参りしています

が、私自身、身延大学卒業後は、こ

の大字院の庵にこもって真剣に修行

を重ね、また誰でも自由にこの庵で

修行出来、そして誰でも救われるよ

うにしたいと思うのも、私の生涯の
念願の一つであります。

私は寺をつぐために出家したので
はありません。父母の悲願を尊び、
これを継承して世の懶める人々のため
に出家したのです。

私は身延山に来て多くのことを学
びました。その中、最も大きな収穫
は、恵まれた者は爪の上の土の如く
稀にして、恵まれない者、しいてゆ
られた者、そして殆どの者が遺去世
よりの因果によって六道に流転して
いるという事実を知ったことでした。

世界的に言えば米ソの対立、白人
と黒の人種問題、インド不可触民

民八千万の存在、等々かえれば限
りがありません。

医者にかかる金もない病人や氣狂
いはいうまでもなく、かえりみられ
ない民衆の余りにも多いことに目を
開かしめられた私は、私の父母が病
人、氣狂の罪業を背負つて邊に斬る
ようだ、私もまた世界の人々の罪業
を背負つて、立山安國の斬りに身命
をさしだして行きたいと思うのです。

人類に祈ること狂人に祈るが如く、
狂人に祈ること人類に祈るが如く
に――

へおわり

楽しい朝のおつとめ



身延山大學三年 藤 塚 義 誠

毎朝、身延山祖廟の勤修には欠

かさず出席されるお上人がいます。

お上人口身延山西谷の南之坊の住職
である南部光養師です。

南之坊は祖廟参道入口の龍首橋の
そばにあります。お上人口毎朝こゝ

から西谷坂をのぼって来るのです。

一綱笠をかぶり、本衣の袖をひる
がえしながら、すがくしい朝の本
山境内を、勧修に往復されるお上人

の姿は、さすがに身延山ならではと

思われる一幅の風物詩です。

お上人は東京方面へ布教のため地
出した以外、南之坊におられる時は
雨の日も、風の日も、一日たりとも
本山の朝勤を欠かしたことはありません。

といつてもお上人日本山に勤務し
ている方ではないのです。勤務者で
ないのに、これは全く奇縁といつ
ほかはありません。

そこで尋ねる時、お上人に直庵その

心靈を尋ねてみました。お二人は、
日、えみをた、えなから次のように
語られました。

「……勤姫というのは勤め難きを
勤めるから勤至というのでしよう。
会社のお勤めでもさうですね。休み
たい遊び天じと思ひながらも、食つ
ためとか生きるために、休きたく
ない仕事でも勤め難きを忍んで、ま
あまあ大禍のないように勤めている
のが大部分でしよう。

然しそれでは自主的な良い仕事が
出来るのはないですね。勤至でも
そうでしよう。義理とか責任とか入
の手前でお圣を競爭しているようでは

まだく、本当の信仰とはいえないで
しようね。

私が本山の朝のお勤めに出るのは
出なければならぬからだととか、人
にすゝめられたからだととか、そうい
つたわけでもありません。

まだお勤めに出ることによって、
人から良く思われるとか、何か巧
い役舞にありつこう、といつたよう
なケチ子の根性は毛頭ありません。

私が勤至に出るのは、本山の勤至

そのものが楽しいからです、心から
楽しい、ただそれだけのことです。

勤至にしても修行にしても、一般
社会の勉強や仕事、或は商売、事業

にして、しなければならないといつたような他律的なの持ち方では、所詮、心から樂しまることはなく、やがて嫌気がさしたり、サボったりして勝ちくなってしまいましょう。

所が、それらのことと自分のものだと、樂しいものなのだ、といつ自主的で考へてやれば、いわゆる人間の本性、自己一丸やればやるほど樂しくなって来るのではないかと想う。

お上人の言葉は、静かにつづきまし矣。

「身延山の荘嚴なることは、祖廟としても本山や奥之院の建物、景觀としても変わりはありませんが、本山の

朝の勤至の莊嚴を忘れてはなりません。仏教各宗の本山のお勤めにくらべてみても、身延山の朝勤ほど莊嚴なものはないのです。

私は前二方に泊られた信者の方々には、一人残らず必ず本山の朝勤に参りするよう薦めていきます。初めて参り行かれた方も、帰りには心から朝勤の有難さに感動しないものはありません。

私の願う所は、本山の朝勤に、あの広い祖廟堂が何時も參拜の信徒で溢れているようになります。これが私の樂しみの一つをしよう」

へあ わ り

信仰相談室

創価学会の独善的排他性について

解答者 日高白娘

おたずね

私は女子大を卒業して中学校の教諭になつたばかりのものですが、受持ちの生徒の父兄に相当数の創価学会員があり、PTAの縁をよいことにして一時は毎晩のように私の下宿へ押しかけて来ては、私に入会するよう、折伏と称して執拗に勧誘したり脅迫したりしていました。

然し私の母は熱心な身延の信者です。私も学生時代から日蓮聖人の御遺文集や法華經に關する書物を求めては読みこいまして、学会員が来ても恐るゝことなく法輪を退してしまいました。最近は彼等もすっかりよりつかくなりましたが、このことを通じて私自身少々考えさせられることが起りました。

それは日蓮聖人の折伏と創価学会の折伏とは、表面的には似ているようであっても、内容的には根本的に違っていると感じながらも、ではこれがどのように違っているのか、私自身その相違を理論的に明確にすることが出来ずにいるということです。御教示下されば幸いに存じます。

〔吉野靜子〕

おーーたえ

A

さて本論に入りきしよう。

なるほど日蓮聖人は「念佛無間、神天魔、真言亡國、律國滅」という四個誓言をもって生涯激烈に他宗を折伏されました。また創価学会も現

人下宿されてあられるようですが、受持ちの生徒の父兄である学会員が P.T.A.を傘にして波状的と或は集団

的に攻撃して来れば、大抵の娘さんなら生徒と父兄の敵はごみになつて仕方なしに入会してしまつか、ノイローゼになつてしまつでしよう。

恐しこれを毅然として受けたち、自分の信念を貫いて喪退された貴女の態度は本当に立派であったと思ひます。そういう態度そのものが既に布教になつてゐるのです。

勘に地獄を折伏と称して改悪してい
ます。

用いる文字は同じ折伏の二字であ
りますので、よく似てゐるようとも
思われましよう。然し既にお氣付さ
のようだ内客的には根本的だ違つて
いて、その相違は天地雲泥です。

今それを仏教の教義をもつて端的に申しますならば、曰蓮聖人の折伏
は「法華聖の廟会思想」に立つてお
り、学会の折伏は「念佛の廢立思想」
に立つてゐるといふことです。

開会というのは、読んで字の通り

開きあわせるといふことで、宗教の

如何をとわず、これを信する信じな
いたか、わらす、生きとし生けるす
べの人々は、等しく久遠劫来、久
遠の本仏教尊の仏子であるという人
同本来の姿を開闢して、本仏教尊と
父子の会合をせしめ、本仏教尊の真
実の教え（法華聖）を受持すること
によつて、久遠の仏子としての菩薩
行を実践せしめると共に、天地位一切
の神も仏も、それらのその教えも
眷属も、本仏教尊の人格とその教え
に帰へ融合せしめて、これにて大調和
の大マンダラ法界を事相として建設
しようとする教義であります。

従つて法華聖の廟会思想にあつて

は、神も仏もその教えも、またこれ
を信する人々も、信しない人々も、
悉く前頭統一されるは、こそ、排斥し
たり被棄したりされるものは何一つ
として無いのです。

法華空場累田の中に

「若し衆生あつてへ法華空を」信
受とごらん音には、さぞに如來の余
の深法の中に於いて示教利走すべし
と詠かれていることは、既に久遠
の本仏教尊に歸一してゐる天地一切

の仏や神、ならびにその眷属に対し
て本仏教尊が、我が子と慈愛する一
切衆生の中、いまだ法華空を信受す
ることの出来ない人々があれば、そ

れらの人々のために、やがては法華
聖悟師へ導入すべく、当座は法華空
以外の教えを示す、ことによつて、先
ず教を利益するより付屬されたもの
であり、このでは法華空に歸一する
ものも第へしないものも、人法の二
面に亘りますべてのものが何一つと
して漏れることがなく、本仏教尊を中
心として、その一念の中に復取され
墨然たる大圓和の世界が現成されて
いる、ことを物語つてゐるのであります。

C

本仏教尊のこの一念を体した日蓮
聖人の折伏は、当然、地宗を討立的
に排撃する折伏ではなく、そういう

相對的対立を超えた絶対なる本仏教尊とその法華聖の立場から、數えてこれを否定しようとする不眞諦法の人々の迷蒙を打破覺醒して、すべての人々を本仏の眞の仏子たらしめようとする慈悲の折伏であつたのでした。

則ち日蓮聖人の折伏は「無事の折伏」ではなく「覺醒の折伏」であります。「統一の折伏」として宗教の如何にか、わらす、その中核たるべき久遠の本仏教尊とその法華聖を顯現確立することを眼目とし、ひとたびそれが確立さればや、善惡品の競争の中には、本仏教尊との如く一切の宗教は、本仏教尊とそ

の法華聖を中心として、本仏の一念の中に根取肯定されるのです。

日蓮聖人が四個の格言をもつて他宗を悉く折伏されながらも、その法華聖法華王菩薩本事品の中では商珍陀如來のことが説かれていたり、日蓮聖人みずから圓頓された御真跡大トントラ（文永十一年の夏のもの）と建治元年十一月のものの中に、金剛界・胎藏界の両部の大日如來ですら衝着されている所以のものも、またここに存するのです。

D

所で廢立といふのは、これも既ん字の通り他の一切を廢棄してこれ

一つを樹立するといつ教義であつて、十なるものは十のまゝ、これを超越
念佛門における建立思想では、称陀
一仏を本尊として立てるために、
他の一切の神も仏もその眷属も、そ
してその教えすらも悉く捨却廃弛し
他の一切のものを専宗廢弛する」と
によつて、あのれの森陀一仏信仰を
確立しようとするのです。

念佛信仰を大成した淨土宗の法然
上人が「總鑑集」という書物をあら
わしたもの、他の一切を廢棄して称
陀一仏信仰を選び立てんがためであ
りました。

E

法華經の開会思想では、相對する

して絶対なる立場、則ち久遠の本仏
般釋の一念から、本来の婆、真實の
身曰融圓初の世界に包羅々取して、
それへ所を与えてしめるものであります。日蓮聖人の折伏は、その大體
和をめざす折伏の剣であり、同時に
裏裏の婆を内在するものであつたの
です。

これに対して念佛の建立思想では
相對する十なるもの、中の一つだけ
を選び出し、般曰一切捨却廃弛、包
羅々取することもなく、廢棄被廃し
てかえり返せどん、否、そうしなけ

れば自己が立たないです。そこに

は厳しい峻別と斗争が起つて来ます。

法華經信仰が絶体的立場から個人

の向上を計りつゝ、全体の調和を建設

しようとすると対して念佛が、相對

的立場から自分さえよければ他はどうでもよい、といったような個人

主義に堕ち入つて行くのも当然のこと

とあります。

F

仏教の教義をかりて、

「創価学会の独善的排他性は、念佛の尊立思想と競争一にするものである」というならば、それをかし学会自体が、くり御夫することでしょう

が、事実はまさしくその通りなのです。しかも念佛が、それでも衆生の悲苦不捨の慈悲を説いているのに較ぶれば、学会の実体は念佛にも遙かに劣るものといえましょう。

「学会の信仰をしなければ罰があるる、地獄にあちる」

というのがその証左であります。

おのれのみを正教として他の一切を邪教とみなす学会の思想は、あくまでも相對的独善であり、法華經でません。そして学会のふりかざす折伏の劍は、破邪でもなく矯正でもなく、凶敵でもなければ調和でもなく

魯道の如キト憎悪と斗争破壞と征服であります。彼等はうそぶきます。

「邪教を撲滅せよ」

何と恐ろしい言葉でしょう。

G

學会員は指導者から、

「洋服の改命の王アリである。」

とおどらされ、教學武装という言葉の中に自ら屢戦感をいたしてストレスの一部を解消することが出来たとしても、かゝる思想が社会に蔓延する時、世の中は一体となることでしょう。それはライヤコレラが社会に蔓延するのです。

一の生々しい過去の歴史的事実をもって今日の創価学会に見る時、彼等の慈善的排他性を今後もお許すとするならば、一の悲惨な歴史が再び國土の上に繰り返えされないとは誰が保証出来ますよう。

H

日蓮聖人六十一年の生涯は、本仏教尊とその法華經を、或はそしり或はないがしろにする人々をみては、激烈な破邪覆正の折伏を展開しつゝもその反面、日蓮聖人を迫害する人々に對して、さえ、その誇法の罪科を一戎れど我が身に背負い、人々に在り代つてまで謙悔懲罪に祈り通して行かれたのでした。

学会が癡狂すればするほど、窮屈な本とする日蓮門下は、ますく如來の正法を棄却して、毒蟲宣令の行進を日本国津々浦々、全世界にまでも押し進めて大調和の宝土を涌現しなければなりません。

来月号の

信仰相談室

創價学会の動向と

日蓮宗青年運動の
在り方について

今日、個人的にも國家的にも、また國際的にもすべての面において、最も必要なことは法華聖の廟会の思想と、これどもとすく実踐であります。



関西街頭布教現地の声

身延山 鶯峰会

身延山鶯峰会學生を主体とする身延山特派布教別動隊が、関西一府四県十三都市、日蓮宗八宗派所管内に夏季街頭布教を展開したことには既に本誌第5号に特集した通りであります。その後、布教隊累々開する予想以上に反響が遠地各所に起つており、その反響は便りに善きのような一時的なものではなく、大河の流るゝが如く次々に新しい宗派を巻き起しつゝあり、特に宗門青年運動が活潑になりつつあるといふ、おびただしい投書もとたらされていきますので、その中の主なものを抜粋紹介したいと思ひます。

管内の融和と興隆

愛知県三河宗務所長 小幡潤生

今日「宗門の組織」ということか

痛切に要望されていますが、裏をかえせば全国的にも地域的にも融和団結に欠けるものがあるからです。三

河内務所管内も決して例外ではあり

ませんでした。管内融和、それは私が所長就任以来、最も心碎いくいた課題でもあつたのです。

所がこのたび身延山布教隊によつて街頭布教が展開されました。管内寺院檀信徒は、そつて出勤し、立正世界平和、創価学会折伏のため終日汗と水になりにまみれながら裏表宣令しました。大きいなる感動がありました。そしてこのことを通じて選案の管内融和は期せずして生じていたのです。街頭布教の功、甚大なりと申せましよう。

管内寺院に

街頭布教の装備

本部行堂会長 長谷川正徳

愛知県尾張・名古屋の両業務所管

内における街頭布教直後、管内僧侶の間に次のように争論が起りました。

「街頭布教を手中行事としよう。」

その際、管内寺院側は身延山布教隊と同し服装を整えよう。」

これに応じて身延山名古屋本願人会の中でも、

「せめて本願人会としては街頭布教に出られる御寺院方の継代立だけは、たとえ何十人分でも寄進しよう

という争論が起つたのであります。

改宗者の続出

三重県布教食浜島秀温

四日市街頭布教後の反響は二つ、その一つは創価学会の反動、学会は市教当日でも卑劣な行動をしていましたが布教後においても市内日蓮宗寺院の看板を夜中一つそり持ち去つたり溝に打ち下して」とが一時續々として起りました。学会の夜盗の如き振舞、笑止の限りです。

もう一つの反響は、日蓮宗へ改宗する者が続出していることです。それらの人々は殆ど創価学会に刺戟さ

れて今までの信仰を反省しながらも、さすがに学会の在り方には義理でさえ覚えて、他により高き眞実の信仰を求めていたのです。だまく今後

の街頭布教を継として日蓮宗のお寺に近づくようになり、継々として身延中念信仰へ改宗しつゝあるのです。

それらの人々は、更に今までの信仰仲間の人々を日蓮宗へ導こうとしています。まさしく街頭布教は僧内に新風を吹き込んだ感があります。

県下立正青年

運動の興隆

奈良県立長大島國静

身延山学生布教隊を奈良県下へ迎

えたのは今度で二回目です。

前回は本年正月六日、県下初の筋
箇布教を実施するに当り、これを契
機として県内宗門青年会を統合して

「奈良県立正青年会」の結成式を行
はれ、布教も同青年会が主催したので
しに。それより約半年、青年運動は
順調に進展して未開拓地区にも新た
な単位団体が誕生し、二度目の身延
山布教隊を迎えるに当つては、より
拡充した県下青年会として街頭布教
を実施することが出来たのでした。
そしてその布教隊、この盛り上がる
こそ宗門の興隆と心強く覚える次第

論会と体育競技会をかねた県下宗門
氣運に乗じて去る九月一日には、討
定です。

論会と体育競技会をかねた県下宗門

は、これも青年会が主体となつて奈
良市街の街頭布教と合同御会武道要
式を挙行したのです。

街頭布教を全国的に！

大阪府教師会長 和田龍連

大阪に身延街頭布教が展開されたのは今回が初めてです。当初には身延山の街頭布教本隊を迎える案もありましたが、本隊ともなれば人数も最底数十名の多さとのほり、距離も遠隔の上齋和の都合もあって、実施上困難が伴いますので、学生布教別動隊の派遣を依頼したのですが、

「別動隊は少人数であっても、地元寺院が布教隊と同じ服装をするならば、本隊を迎えるのと同様、盛大に街頭布教を行つことが出来る」
「身延山布教隊と地元寺院と一体となつた街頭布教に対する大衆の感銘は意外に大きい。これに注目しなければならない。」

一歩で本隊を迎えるのと何ら異る所はなく、初回でありますから布教は大

成功でありました。

「身延山布教本隊の行動半径には

限界があるが、別動隊であれば今回のように、双方とも手堅に全国到る所で街頭布教を行つことが出来る」

「別動隊は少人数であっても、地元寺院が布教隊と同じ服装をするならば、本隊を迎えるのと同様、盛大に街頭布教を行つことが出来る」
「身延山布教隊と地元寺院と一体となつた街頭布教に対する大衆の感銘は意外に大きい。これに注目しなければならない。」

「一つとしていた。則ち身延山布

教隊は、たゞえ少人数であつてもペテランを派遣して全国的に衛賣布教を展開すべきことが要望されたのであります。

身延中心信仰の高揚

兵庫県東部富田栄妙

等しく深い感動の中で信心を堅固にすると共に、ますます身延山護寺の念を深くしたことでした。衛賣布教のあの姿、あの意氣をもつて全国六千ヶ寺が打って一丸となつて立ち上るならば「身延即宗門」「宗門即身延」の大理想は、こゝに実現されていいるでありますよう。

青年講習令を定例化

田中行明

堂々たる裏教宣令の邊に、さながら七百年前の日蓮聖人の在時を思ふが如く、思わず合掌礼拝せずにはおれなかつたと申しております。そして

兵庫県西部では身延山布教隊を迎えて西宮市において管内相信徒協議会主催のもと、一泊二日の青年行学講習会を開催しました所、初めての試

みながら空前の盛事となり、その成果も甚大であったことが記されております。

特に講習会用講式に際して管内担任者徒議会々長坂塚隆重氏が挨拶でござました通り、「これを契機として青年学習講習会を管内耳中行事として耳に込ず一回は開催する」となり、昭和三十九年夏以降その予算も編成されるとが決議されたのであります。

講習会の翌日、姫路街頭布教が実施されましたが、講習会の青年も大半参加しており、その後、管内各地に青年運動が萌芽し、既に青年会を

結成した寺院もあらわれて来てあります。

在家青年諸士が法華経講義をつけて世界の平和、国家社会の安寧を祈つて共々祈願に垂露宣令することは萬法為國・國に心強い限りであります。



編集方針と誌料について

編集部

これまでに

本誌「鷲峰」は創刊以来、号数も
十六号を数えるに至りました。平均
二ヶ月に一回の割合で発行したこと
になります。実は当初、毎月一回発
行する予定でいました。然し身延山
大学高校の学生には、一般大学高校
と違って学校の授業以外に本山勤務
があり、個人的自由時間は殆どなく、
勤務には土曜も日曜もなしのです。
特に本誌の母体となつて いる鷲峰会

の学生は、春夏冬の年三回の休暇は
あっても、その休暇でナース休暇」と
いふして全国各地へ身延山布教別動
隊として街頭布教に出かけていく現
状です。このため教單、編集、書寫
印刷そして製本から発送するまでに
は、本山の新勤時まで数枚すること
も屡々であり、試験期、布教期を口
さんで日遅く隔日発行という状態を
恐ばねはなりませんでした。

「鷲峰」は学生伝道紙として該に

さ、やかなものであります。然しそ

することが出来ました。

れどもいかわらず今まで物心両面

に亘って多大なる御声援、御援助を

贈られました全国の読者皆様には
心から感謝の意と表わすものであります。

さて本誌は当初、薦峰会の学生並
々木友翠君が墨写印刷機一式を提供
し、会員学生一同小遣いを出し合
て始めたものでしたが、経費の点、
容易なことではありませんでした。

幸い林照二と田学生行脚布教を展

開してより、その浮財を発刊費用に
当てることが出来、本誌も無料のま
ま前後六回に亘って読者皆様へ配布

所が本誌を発行する」と、全国各
地の読者より

「薦峰はま」と結構な雑誌であ
るが読料がきまつていひいため、い
くら納めてよ」やら判らずに困って
いろ。無料で頗るわけにもいかない
し、人にすすめたくても、すすめら
れずにつる

といふ投書がヒンヒンと来るよう
になり、特に各地の青年会や寺院よ
りも、会員や信徒に配布する都合上
早く読料を設定するよう、といふ

読者の声

声が高くなつて参りました。

本誌改訂の機

(発行は毎月一日)

本誌は添削のことよりも先ず内容の充実を計ると共に、発行日を定めて毎月一回、初期の方針通り発行しなければなりません。

幸いオ五号より表紙印刷一切を大

阪東洋印刷社長藤原秀襄氏が寄進されることになりましたので、これを契機として内部の紙質も中質に改めオ六号より編集もバラエティーに富むこととして、今後の飛躍のススリノケ台とすることが出来ました。

昭和三十八年度は、この六号で終

りますが、来年十二月に発行する昭和三十九年度「オニ巻・オ一號」の正月号よりは毎月一回一日に発行と決定し、内容もより充実したものとして著者皆様の御期待に添えるよう努力いたします。

本誌究極の目標

鷲峰会の目的は、日蓮大聖人の御理想にもとづき、

一、身延山を本として法華經を広宣流布する。

一、法華經を広宣流布して、身延山を世界の大身延山として、に本

門の戒律を建立する。

といつーとあります。従つて本誌も、この大目的達成を期する文書伝道の使命を負負つております。

特に本誌の題名が「靈峰」とあり、表紙の写真もインド靈峰山へ渡る身

延の釈尊像をかゝけていますように

法華經が説かれた靈峰山と、本朝の靈峰山（身延山）を讃嘆すると共に日蓮大聖人が諫説八幡神の中で、

「月口西より東へ向えり、月氏（インド）の仏法の東へ流るべき相なり。日に東より出で西へ入る、日本の仏法の月氏へ返るべき瑞相なり」

とお書きされていきますように、靈峰山で説かれた法華經が、インド、西

域、中国、韓国、日本へと流傳して来た過程ならびに日本の仏法が身延山よりインドの靈峰山へ帰つて行くべき布教事蹟等を紹介して左裏面布に費したいと思ひます。

あゆみを中心

蓋し靈峰会は身延山大学高校の学生會が中心となりておられますので、勢い靈峰を日蓮門下青年不^可のものとなり青少年を中心として一般信徒の方々にも解り易く愛護して頑けるようになりたいと想ひます。

今日、日蓮宗各寺院よりも、まだ盛んとなりつつある各青年会よりも、

それそれ機關紙が発行されていきますが、その大半はその寺庵その青年会に関する連絡伝達紙の傾向がありますので、本誌は飽まで一方にひたよらない宗門普遍の青少年向宗教誌として、どの寺院、どの青年会にも向くものにしていと思います。

従つて難解な専門的教義は出来る限り避け、そういう教義は信仰体験談等の中に自然にじみ出るようだし、また法華經義よりもじみ出て来る信仰体験談等を掲載したいと思します。

曾の出家の勧機、齋饌充菴、そして身延山を世界の大身延とするに必要と記事を幾回の許す限り万載したいと鬼ます。
四。

編集長に曰高白象師

幸い本誌の編集長に齋饌会學生の中核者である本山布教部の曰高白象師を推薦することができました。曰高師は身延山新興布教の創設者であり、その道のベテランであります。また昭和三十三年より三十七年にかけて本山修行の「私のぶ」教籍を今までに集録充実された方でもあります。

並運動に全力を傾けていりますので、本誌の上にも紙費無の活躍が期待されるものであります。

読者の投稿

本誌は信仰体験談に重点をおいていますので、全国読者皆様より入信の動機とか、精神的・肉体的信仰体験談とか、或は信仰問題、人生問題に関する貴重な等々をお寄せ下さい。ことを期待しながら致します。

用紙は四百字誌原稿で十枚前後に頗ります。但し原稿は編集の都合上お返し致しませんので必要な方は控えを取っておいて下さい。なお採用

原稿の中には文藝の表現不足等もあるかと思いますので、編集部で補修させて顶くことを御了承願いたいと存じます。

誌料一部五十四

二年間六八百円に

かくして本誌の編集が充実して来ますれば、当然出版費用もかこんで参ります。先ず第一に毎月発行となりければ学生が購入、印刷、製本などする暇はありませんので、専門の印刷所に依頼することになります。また印刷所に依頼する以上、読者皆様の御協力次第によつては墨写印刷から活版印刷へ発展することも出

来ます。

そこで毎月一回、年十二冊発行方
針のもと、紙代、墨代、墨代、印刷代、
製本代、封筒代、発送郵便代、それ
に折込数箇代、編集費等一切を含め
て一部五十四、半年三百円、一年六
百円で御協力をお願ひ致したいと思
います。

誌料は昭和三十九年度の第二巻、

第一号の正月号より始めたいと思
ますので、志納は前で貰えれば・発
送台帳の整理上、非常に好都合に存
じます。

鷲峰賛助会員費

について

年三十人、一年では六十人、五年で

本送付、読者皆の誌料のほかに、
鷲峰会学生が休暇を利用する全国各
地における行脚街頭行戻の済財を今
後とも投入しつゝ、内容の充実と部
数の拡張に資して行く方針であります
が、なお読者皆々様の中にも「鷲
峰賛助会員」として個人の賛助誌料
のほかに年間三千円の賛助会員とも
うけたいと思ひます。

は三百人、十歳では六百人の青少年その他の方々を法華経信仰へ導く體となり、広宣流布の一助となるものです。

表紙説明 鷲峰の歎尊

贊助会費は申込みのつど受けますが、年三回の分納の便宜も設けています。なにとぞ御理解の上、御協賛のほど切にお願い申上げます。詔書ならびに贊助会費の申込みは

の御染墨

★表紙「鷲峰」の題字は日蓮宗管長身延山法主藤井日靜猊下の御染墨

★表紙の写真はインド靈鷲山原の仏舍利塔本尊として身延山より奉納される御遺体

山梨県南巨摩郡身延町

日蓮宗總本山身延山文選寺内

身延山 鷲峰会

目下身延山本堂内陣に安置
★釤造額主は身延山大本願人源
内豈良氏、依製は京都平安美術
術社長富山高靜氏

編集

後記

▲ 身延全を色々といた紅葉も何時しか散りそめ、冬寂の氣ひとしお身にしめる。

▲ 冬来りなは春遠からじ・葉は散

つてこそ新芽をふく・夜が明けれ

は朝が来る・失敗の次には成功が

あり、病氣の次には健康がある。

▲ 人間つねに希望をもっていたいので前進していく自分でありたい

ものである。

▲ 光陰矢の如しと人もいう。勞を
惜むな・時間を惜め・今といふ時
間は二度と繰りかえされることは
ない・時間を無駄にすることは自
己の命を粗末にするにも等しい。
考え方を改めることですね(白象)

鷺峰(昭和三十八年)オハ六号

昭和三十八年十一月二十日

昭和三十八年十二月一日

印 刷 所

甲府天野書写堂

発 行 所

山梨県南巨摩郡身延町

編集兼発行者

日高白象

印 刷 所

甲府天野書写堂

販 售 費

一 諸 五〇 円 (一 千 共)

費

半 年 三〇〇 円 (一 年 六 千 共)

(分 打 可)